

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32634

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730396

研究課題名(和文)コーポレート・レピュテーションが企業業績に与える影響構造の実証的解明

研究課題名(英文)An empirical study on the relationship between corporate reputation and firm performance

研究代表者

岩田 弘尚(Iwata, Hironao)

専修大学・経営学部・教授

研究者番号：50406360

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、一般消費者を対象として実施した「日本企業の評判に関するアンケート調査」と題する質問票調査のデータを利用して、わが国上場企業のレピュテーションが企業業績に与える影響構造を実証的に分析することにある。結果として、わが国上場企業のレピュテーションは、ステークホルダーの期待と感情という2つの側面から構成されており、それがステークホルダーのロイヤルティを高めていることが実証された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to elucidate mechanisms of the relationships between corporate reputation, stakeholder loyalty and firms performance. Literature review, theory based conceptualization, and questionnaire surveys allow us to develop and test an structural equation model(SEM). Statistical results indicate that corporate reputation have a positive effects on stakeholder loyalty in Japan.

研究分野：管理会計

キーワード：レピュテーション・マネジメント コーポレート・レピュテーション 企業の評判 インタンジブルズ  
無形の資産 管理会計 実証研究

### 1. 研究開始当初の背景

コーポレート・レピュテーション(企業の評判)は、ある企業に対して抱いたイメージおよびその企業の過去の行為および将来の期待に基づいてステークホルダーが何らかの基準に照らして当該企業を評価したものであり、企業価値を創造するインタンジブルズ(無形の資産)である。

近年、企業不祥事に起因するレピュテーション・リスクの管理の必要性、株主重視の経営からステークホルダー志向の経営への移行、企業価値の源泉としてのインタンジブルズのマネジメントに対する関心の高揚などを背景として、レピュテーション・マネジメントに対する実務的な関心は高い。このような状況を受けて、わが国の管理会計研究においてもレピュテーション・マネジメントの重要性が認識され、事例研究にもとづいて規範的なレピュテーション・マネジメントの理論構築が行なわれてきた。

ところが、わが国においては、規範的研究が重視されてきたがゆえに、レピュテーション・マネジメントの理論的な裏付けとなる実証研究が伴っていないという課題が残されている。具体的には、コーポレート・レピュテーションの測定とコーポレート・レピュテーションが企業業績に与える影響構造の解明の2つである。このコーポレート・レピュテーションの概念をどのように測定すれば良いかという問題を解決することは、レピュテーション・マネジメントの理論を構築し、その理論を実践に移すための前提条件である。しかしながら、国外の研究の進展とは対照的に、わが国におけるコーポレート・レピュテーションの概念を実証的に検討した研究はほとんど存在しない。また、わが国企業を対象とした、このコーポレート・レピュテーションが企業業績に与える影響とその構造を解明しようとする実証研究もほぼ見受けられない。

そこで、わが国上場企業のレピュテーションを質問票調査によって測定し、企業業績との関係を多角的に検討・実証することで、規範的に体系化されつつあるレピュテーション・マネジメントの理論にハードデータによる裏付けを与えることができるのではないかと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、インタンジブルズであるコーポレート・レピュテーションが企業業績に影響を及ぼす構造をわが国上場企業対象の実証分析によって解明することにある。その目的を実現するために、大きく次の2つの課題を設定した。

課題1: コーポレート・レピュテーションをわが国においてどのように測定したら良いのかを実証的に明らかにする。

課題2: コーポレート・レピュテーションが企業業績に与える影響と構造を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究では、先行研究をサーベイし、理論的に検討した上で、質問票調査を統計的に分析する実証研究を行った。具体的な研究の方法は、次の通りである。

課題1: 代表的な先行研究である van Riel, and Fombrun (2007)に基づいて「わが国上場企業のレピュテーションは、業績、製品・サービス、リーダーシップ、職場環境、企業市民性、ガバナンス、革新性という7つの構成要素と23の下位尺度によって測定可能である」という仮説1を設定した。また、Ponzi, Fombrun and Gardberg(2011)に基づいて、「わが国上場企業のレピュテーションは、好感、信頼、尊敬、称賛という4つの感情面から測定可能である」という仮説2を設定した。これらの仮説検証のために、質問票調査を実施し、確認的因子分析を行う。

課題2: 課題1で得られたデータを用いて、コーポレート・レピュテーションが企業業績にどのような影響を与えているのかを実証分析する。その際には、図1で示すレピュテーション・ドライバーがコーポレート・レピュテーションに影響を与え、コーポレート・レピュテーションがステークホルダーのロイヤルティ(競争優位)を導き、ステークホルダーのロイヤルティが最終的に企業業績に影響を及ぼしているという関係性を想定した。このモデル化にあたっては、先行研究では見受けられない本研究独自の工夫を取り入れている。つまり、コーポレート・レピュテーションと企業業績の直接的な関係性を想定するのではなく、資源ベースの理論とシグナリング理論に基づいて、コーポレート・レピュテーションがステークホルダーの支援行動に与える影響を加味している点である。

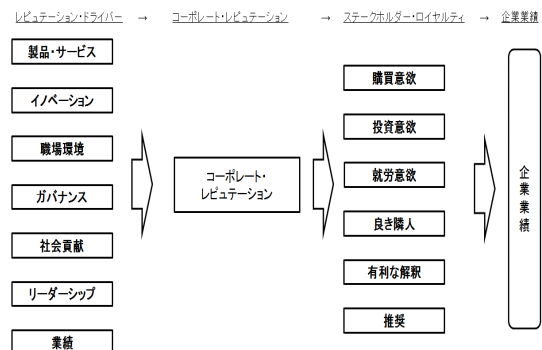


図1 分析フレームワークの概念図

図1で示した関係性を具体的に実証するために、Fombrun, Ponzi and Newburry(2015)を参考に図2で示す共分散構造分析を実施する。その際に、以下の3つの仮説を設定した。

仮説3：情緒的なコーポレート・レピュテーションはステークホルダーのロイヤルティに影響を与える。

仮説4：ステークホルダーの期待から構成されるコーポレート・レピュテーションはステークホルダーのロイヤルティに影響を与える。

仮説5：ステークホルダーのロイヤルティは企業業績に影響を与える。

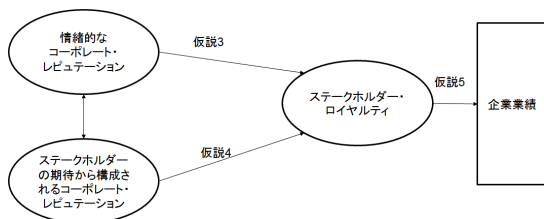


図2 共分散構造分析のモデル

なお、課題1と課題2の分析で用いる「日本企業の評判に関するアンケート調査」と題する質問票調査は、2013年から2015年の毎年3月にわが国一般消費者にレピュテーションの高いと思う上場企業とその理由を尋ねて、1,500サンプルを回収するようにオンライン調査会社を通じて実施された。その際、回答者の性別、年齢、都道府県別の人口分布が各調査時点における最新の総務省統計局発表の人口統計にできる限り近似するように配慮して回収している。

#### 4. 研究成果

##### 課題1：

仮説1「わが国上場企業のレピュテーションは、業績、製品・サービス、リーダーシップ、職場環境、企業市民性、ガバナンス、革新性という7つの構成要素と23の下位尺度によって測定可能である」を質問票調査で得られたデータを用いて確認的因子分析にかけた結果、仮説は支持された。

仮説2「わが国上場企業のレピュテーションは、好感、信頼、尊敬、称賛という4つの感情面から測定可能である」を質問票調査で得られたデータを用いて確認的因子分析にかけた結果、仮説は支持された。

##### 課題2：

図2の分析フレームワークに基づいて、設定した3つの仮説を共分散構造分析によって検証した。

仮説3「情緒的なコーポレート・レピュテーションはステークホルダーのロイヤルティに影響を与える」と仮説4「ステークホルダーの期待から構成されるコーポレート・レピュテーション」の結果は、図3に示すとおりである。

りである。結果的に、仮説3と仮説4は支持され、コーポレート・レピュテーションは、ステークホルダーの情緒とステークホルダーの期待という2つの側面から、購買意欲、投資意欲、勤労意欲、良き隣人、有利な解釈、推奨という要素から構成されるステークホルダーのロイヤルティ(競争優位)を高めている構造が実証的に明らかにされた。

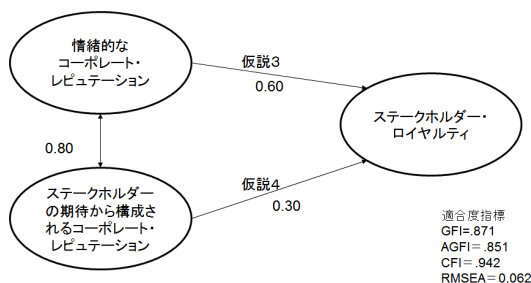


図3 共分散構造分析の結果

仮説5のステークホルダーのロイヤルティから企業業績への影響については、データの整理に時間がかかり研究期間内での解明には至らなかった。ただし、コーポレート・レピュテーションと企業業績の相関関係や一部の因果関係は実証済みである。

また、当初の研究計画には織り込まれていなかった付随的な研究結果が得られた。それは、ステークホルダーが期待する7つのレピュテーション・ドライバーの実態調査から、企業とステークホルダーの間には情報の非対称性が存在しているというデータである。このことから、レピュテーション・マネジメントを戦略的かつ効果的に行う必要性があるという示唆が得られた。

本研究の貢献は、次の通りである。第1に、コーポレート・レピュテーションと企業業績の関係に関する実証研究について、従来の研究にはない資源ベース理論とシグナリング理論という2つの理論ベースに基づいた分析モデルを提示した点である。第2に、わが国上場企業のレピュテーションは、ステークホルダーの情緒とステークホルダーの期待という2つの側面から構成されていることが確認的因子分析によって実証された点である。第3は、コーポレート・レピュテーションがステークホルダーのロイヤルティ(競争優位)を高めていることが共分散構造分析によって実証的に明らかにされた点である。以上より、コーポレート・レピュテーションがステークホルダーのロイヤルティを高めるインタンジブルズとして機能していることが明らかになった、すなわち、コーポレート・レピュテーションが企業業績に与える影響構造の一端が明らかになったと言える。

本研究に関連して直接的に残された課題は、仮説5の実証である。この点については、データセットは既に揃っているため、本研究期間終了後に引き続き分析を実施する予定

である。また、実証研究の結果に基づいて、ステークホルダーの期待と現実のギャップを埋めるためには、レピュテーションを構成する7つの要因を現実の企業活動の中で戦略的な視点からどのように管理したらよいかを明らかにする必要がある。すなわち、レピュテーション・マネジメントの理論フレームワークの構築が本研究の将来の展開である。

<参考文献>

- Fombrun, Ponzi and Newburry(2015), "Stakeholder Tracking and Analysis: The RepTrak System for Measuring Corporate Reputation," *Corporate Reputation Review*, 18(1), pp.3-24.
- Ponzi, Fombrun and Gardberg(2011), "RepTrak™ Pulse: Conceptualizing and Validating a Short-Form Measure of Corporate Reputation," *Corporate Reputation Review*, 14(1), pp.15-35.
- van Riel, and Fombrun (2007), *Essential of Corporate Communication, Implementing Practices for Effective Reputation Management*, Routledge.

## 5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

岩田 弘尚「コーポレート・レピュテーションに関する質問票調査の結果報告」『専修マネジメント・ジャーナル』(査読なし)、Vol.5 No.1、pp.37-46、2015年。

岩田 弘尚「レピュテーション・マネジメントの現状と課題—日本企業の評判に関するアンケート調査に基づく分析—」『日本知的資産経営学会誌』(査読なし)、創刊号、pp.30-49、2014年。

[学会発表](計2件)

岩田 弘尚「コーポレート・レピュテーションに関する実態調査報告 - わが国一般消費者に対する質問票調査の分析に基づいて - 」日本管理会計学会 2015年度年次全国大会、2015年8月29日、近畿大学(大阪)。

岩田 弘尚「コーポレート・レピュテーションの管理会計 実証研究の現状と展望」(統一論題報告) 日本原価計算研究学会第39回全国大会、2013年8月31日、専修大学(川崎)。

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

岩田 弘尚 (IWATA, Hironao)  
専修大学・経営学部・教授  
研究者番号：50406360